

《翻訳》

# 『バルザック逸話集』 (序文と編集 ジュール・ベルトー)の翻訳(1)

前文と訳 佐藤雅男\*

前文 (翻訳にあたって)

小林秀雄(1902-1983)の新潮社全集に、処女小説の「蜻の自殺」(1922)や哲学的文章の『感想』(1963)などが収録され、彼の思想家としての全体像を把握する可能性が深化した。だが、彼の所謂、「創造的批評」の萌芽的発生を暗示する文章が、全集に収録されていない。それは1927年から1929年まで、『文藝春秋』に匿名で連載された「ランボオ伝」「バルザック伝」「バルザック逸話集」「ボオドレエル伝」などの初期の評伝類である。こうした一連のフランス文学者の評伝は、400字原稿用紙で270枚程度の量になる。

以前、この問題に関して、私は、「小林秀雄の匿名連載——ランボオ・バルザックの評伝」(専修人文論集第89号2011年10月)と「小林秀雄の匿名連載(2)——「ボオドレエルの評伝」(専修人文論集第91号2012年10月)に指摘した。その要点と補足を述べれば、「ランボオ伝」が、1927年7月から翌年5月に亘り、匿名の埋め草原稿として掲載された。途中11月に「ボオドレエルの最後」という文章があり、4月に休みの回がある。それ以降は再度、「ランボオ伝」が連載され、全9回で終了する。これらの一回毎

---

\*専修大学文学部兼任講師

の量は、原稿用紙10枚程度である。

「ランボオ伝」が終了した翌6月、同誌に匿名の「バルザック伝」(続く)及び、「バルザック逸話集」という二つの合わせて20枚程度の文章が掲載された。いづれの年譜にも記載されていないが、文体から推察するに作者は小林秀雄である。彼はこの時期に、長谷川泰子との同棲生活を解消し、大阪から奈良へと関西を彷徨していた。志賀直哉の世話になったのもこの時期である。そうした混乱状況でも、いわばヤツツケ仕事の、メ切原稿を編集局に送ったのであろう。

そして「バルザック伝」は、(続く)の記述通りにはならず、7月と8月の夏の連載は中断された。バルザックの評伝に、手を付けてみたものの、その対象の大きさ故に、構想が余りにも壮大に成り過ぎたのであろう。小林は連載の不可能を予感して、資料的に保持していた「バルザック逸話集」を10枚程度に纏めて添付することで、「バルザック伝」の連載は見切った。だが、そのことで、この月の原稿料は2倍になった可能性もある。その時期の『文藝春秋』の編集長は菊池寛であった。7月には、長谷川泰子と同年の妹富士子が、9月に漫画家の田河水泡と結婚することを、手紙で知らされる。そして連載は、9月から「ボオドレエル伝」に切り替わる。同月には、妹富士子への手紙で、「これから少し書けそうな気がする」と言う。

この時期は、小林秀雄研究に於いて謎の多い所である。だが、この頃に、おそらく彼の表現者としての核心が定まった。そして実生活の混乱状況の渦中で、匿名と言えども公式に書かれた文章が、バルザックに関するものであった。その後、一年余りに亘り、「ボオドレエル伝」が、ほぼ毎月連載され、小林は関西から東京に戻り、1929年9月の『改造』に「様々な意匠」を発表する。其処には、「私は、バルザックが『人間喜劇』を書いた様に、あらゆる天才等の喜劇を書かねばならない」の発言がある。

彼にはバルザックという19世紀を代表する作家の存在はランボオやボオ

ドレエルと同様に重く、その後も多様な角度から言及された。その評伝の原初形態の断片が、「バルザック逸話集」に顕現している。その後には展開されたドストエフスキ論にせよ、ゴッホ論にせよ、そこには評伝的性格が在る。小林の「創造的批評」に於ける作家の書簡や逸話などの資料の使用法を検討するにあたり、「バルザック逸話集」という初期の文章は、単なる断片として放置出来ない。其処には小林の方法の隠された原型が存在するからである。

小林が訳読した原文が何処にあるか探す中で、*Balzac anecdotique : choix d'anecdotes recueillies et précédées d'une introduction* であることが判明した。それはジュール・ベルトー (Jules Bertaut 1877-1959) によって編集され、1908年に、Paris bibliothèque international d'édition から出版された。原文の頁数は94頁で、翻訳は出ていない。日本語に全訳すると原稿用紙で100枚程度の量になる。

題を直訳すれば、『逸話としてのバルザック：選び抜かれた逸話の収集と、それに先行する序文』であろう。この書はジュール・ベルトーの序文と、彼自身が内省的に選集した、長短織り交ぜの42個の、バルザックをめぐる主要な人々が語ったエピソードで出来ている。バルザックの逸話には、その傍にいたレオン・ゴズランの『部屋ばきのバルザック』がある。日本語訳された幾つかのバルザック評伝にも、部分的に引用されているが、日本語の全文訳は出ていない。

古典的評伝には、シュテファン・ツヴァイクの『バルザック』がある。<sup>(1)</sup> その「第八章 書斎のうちとそと」に、「今日伝わっている画像の四分の一、二が戯画であって肖像画でないのは偶然ではない。また彼の同時代の人たちが二千の逸話を記録したが、正確かつ重要な生活描写を何一つ書かなかったことも偶然とはいえない。これらの事実はすべて、バルザックの人物がパリ人に天才ではなしに奇人という印象を与えたことをはっきり示している。」とある。La anecdote には、辞書的に、①逸話、小話 ②(芸

術作品)の非本質的細部、枝葉末節(『クラウン仏和辞典』三省堂)の意味がある。ツヴァイクは所謂逸話を、非本質的細部と見なした。だが、その効用は決して捨てずに、『人間喜劇』の創造との関わりで、小話の細部を解釈的に膨らまして、写実主義者としての作家像を描いた。水野亮の名訳で知られる評伝が、魅力的作品なのは事実である。しかし、其処には何処までもツヴァイク自身のバルザック像という性格が濃厚である。

今日、その対極にあるのは、アンリ・トロワイヤの『バルザック伝』などである。<sup>(2)</sup>其処では、周囲の女性達の往復書簡を資料にして、客観的な人物像が描かれている。それはツヴァイクが彼自身の見解を強く押し出したのと、異なる方法を取っている。並べて見れば、両者には補完的相補性がある。そして、アンリ・トロワイヤも、ゴーチエの『バルザックの肖像』や、ラマルチーヌの『バルザックとその作品』、そしてレオン・ゴズランの『部屋ばきのバルザック』などの逸話をツヴァイク同様、資料的に使用した。

ジュール・ベルトーの編集した逸話集は、こうした本格的バルザック伝より時代的に先行する。彼は、その序文で、「浪漫主義は、これらの逸話で、必ずや復権するに違いない。それは、逸話をめぐる人々の表面的な言い回しだけでなく、その感情や精神の様相によってである。」という信念を語った。<sup>(3)</sup>いわば彼は、le anecdotier ①逸話好きな歴史家(『クラウン仏和辞典』)として、周囲の人々が残したバルザックの逸話を収集し、配列に工夫を凝らし、浪漫主義の側面を浮き彫りにした。その編集には、レオン・ゴズランの語りが多く収録されている。他の語り手はラマルチーヌ、ゴーチエ、バルザックの妹のシュルヴィルなどである。また、逸話に登場するのは、ジョルジュ・サンドやヴィクトル・ユーゴーなど多くは文学史的に重要人物である。ジュール・ベルトーの *Balzac anecdotique* には、序文で主張された浪漫主義者としてのバルザック像や、逸話の有用性への信念を含めて、単なる娯楽に止まらない思想的意味がある。ツヴァイクや、

トロワイヤは、其々の肖像画を描いたとも言え、バルザック像の重さでは遙かに凌駕されている。後続の二人の評伝家は、参考文献にジュール・ベルトーの名を挙げることにすらない。しかし、ベルトーは編集者の立場に徹して、彼が内省的に選別した様々な逸話を、まるで動く影絵のように構成して提示した。この『逸話集』には、一般読者の興味や好奇心を刺激し、その文学的夢想を掻き立てる性格がある。そうした作家像の浪漫的喚起には、決して色褪せない価値がある。

以下、このジュール・ベルトーの原文を、小林に倣い、『バルザック逸話集』と呼ぶことにする。小林が初期の「ランボオ伝」や「ボオドレエル伝」に使用した原文には、現在、他の翻訳者の日本語の全文訳がある。<sup>(4)</sup>だが、『バルザック逸話集』は、他の外国語や日本語に翻訳されていない。それで拙くても、私が全文を訳してみようと思った次第である。

小林の、ランボオやボオドレエルの評伝の翻訳方法と形式は極めて自由である。大事な所は原文に即して訳すが、不必要と見なされた部分は容赦なく省かれ、文章の量は、原文の5分の1程度に縮約する。それは純然たる翻訳でも、独自の創作でもない。小林自身が全集に入れるのを禁じたことは納得できる。だが、その文章の迫真力には類を見ない所がある。同様に、一回で完結した「バルザック逸話集」も、原文の42個の逸話の9つだけが選択され、簡潔に意識され、それを解体的に再構成する(逸話に番号をふれば、29, 23, 9, 7, 5, 10, 6, 38, 20, の順)。自然主義的な告白だけが文学ではない。むしろ、「ありのままの告白」を活かすためにも、小林は逸話の効用を、枝葉末節とは見なさず、積極的意味や価値を見出していた。(「菊池寛」等)

ジュール・ベルトーの原文を訳読するのに、9つの小林の意識は参考にした。今回の翻訳の試みは、小林が使用した原文に戻って、私自身で読解する作業である。正確には、〈模倣〉と訓練と言うべきであるが、それを、初期小林秀雄の思想表現の特質を再検討する資料の一つに加えたい。本稿

は、規定枚数の関係から前半のみの掲載である。尚、原文に目次は無いが、全体構成を俯瞰するために、新たに目次を作った。拙訳や誤訳に関しては、どうかご批判やご教示を伺いたい所存である。

『バルザック逸話集』<sup>(5)</sup>

目次

序、【浪漫主義と逸話】—ジュール・ベルトー

I, 【風変わりな容貌】

1, 特徴のある鼻と猛獣使いの眼—テオフィル・ゴーチエ 2, 太った男—レオン・ゴズラン 3, 上機嫌の絶え間なさ—ポンタビス 4, 不調和な衣服—ラマルチヌ

II, 【生活と趣味】

5, 観劇嫌い—レオン・ゴズラン 6, 執筆の様子—ウエデット 7, 大食漢—レイ・ニコラルド 8, 果物の食べ方—レオン・ゴズラン 9, 珈琲の焙煎と紅茶の秘儀—レオン・ゴズラン 10, 煙草嫌い—テオフィル・ゴーチエ

III, 【社交界での異様な振る舞い】

11, 或る文学の夜会で—フォルニエ 12, 常習的な犯行—無記名 13, 華麗な杖—ウエデット 14, 内輪のパーティー—フェリイ 15, 夜会からの退出—オーガスト・ヴァルヴィエ 16, ジュール・サンドに与えた白い馬—ウエデット 17, マカロニと英国の若い女性—レオン・ゴズラン 18, 青い上着と金ボタン—エルネスト・バザアル 19, 愛想の良さ—ジョルジュ・サンドに即して 20, 異様な格好で送られたジョルジュ・サンド—フェリイ 21, ウィーンでの若い学生の誠意—シュルヴィル 22, 舞踏会での頭巾つきマント—アルベリック・スコンに即して

IV, 【小説家の特異な人生観】

23, 人生とは勇氣—無記名 24, ベルニー婦人の思い出—フェリイ 25, 女性の手紙と文体の形成—フェリイ 26, 文学に通じた人々—ガゼット 27, シャンフルーリイ—との類似—無記名 28, 未知の訪問—シャルル・モリス

V, 【ジャルディ荘にて】

29, 斜めの土地—レオン・ゴズラン 30, 小さい鈴—レオン・ゴズラン 31, 債権者—レオン・ゴズラン 32, 空想的調度品—レオン・ゴズラン 33, 胡桃の木—レオン・ゴズラン

VI, 【夢と現実の間で】

34, 優雅な趣味—アルベリック・スコン 35, ドラマとコメディの夢—レオン・ゴズラン 36, 『赤い馬』の協会—アルフォンス・カー 37, オデオン座の公演チケット—フェリイ 38, 『クロニクル・ド・パリ』出版の画策—レオン・ゴズランに即して 39, デュタックとの関係—シャンフルーリイ 40, 戯曲の共同制作—無記名

VII, 【1948年頃の出来事】

41, ロワイヤル宮殿への侵入—無記名 42, 代議士の代表権—フェリイ

(訳文)

序, 【浪漫主義と逸話】—ジュール・ベルトー

19世紀前半の作家の間でも、特にバルザックの影絵には、逸話に最適な事柄が提供されている。その人物の独創性、彼が強制された余りに特殊で奇妙な生活、その生存における多くの災難、私などには、とても理解に苦しむような混乱、さらなる不均衡、驚異、不安定、尚且つそれが娯楽的でもある諸相の全てが、彼という一個の人間の肖像が描かれることに協力する。

おそらく彼の最大の特徴は、あらゆる人間を解放させる素晴らしい活力である。私達はいずれの時でも、彼の喜びや悲しみ、その信頼や絶望を見る。そこがパリでも旅行先でも、食事会や訪問先、通りや劇場の何処であつても、熱狂的な解放がある。それは過度な笑いと言の力であり、激越な好奇心とほとんど不安定なまでの発言である。極めて多様な生活を前に、彼は往来し、動き、走り、笑い、お喋りをし、議論する。それは熱狂的な

活気に溢れ、1秒で千時間、まるで一分で千の暮らしを実現する。この背が低く、庶民的で太った男に広がる感受性と豊富な想像力には、実に驚嘆すべきものがある。

こうした異常な活力の謎は、長い間、その仕事を通じて推測されてきた。しかし、逸話はそれに生々しい事実の証明を付加する。人々は其処に特徴的な幾つかの証拠を見いだすであろう。それは外部に起こった出来事の心像を、まさに反映する想像力からの現出である。其処には、「現実とは一つの真実なる幻覚である」という後世のテーヌの最適な定義を思い出させるものがある。現実とは一つの真実の幻覚である。いわば、バルザックには、全ての現実と明瞭な真実感とは等価であった。『人間喜劇』の作者の逸話を（茲に秘められた沈黙さえも）、人々はその友人や文学的同業者の陰口と見なす。それで唐突に、次の様に叫ぶことで、その短絡的思考を中絶する。

「それで、今、文学的現実に戻れば、一体、主人公のラスティニヤックと結婚したのは誰であったのか？」

こうした問いに、本質的に答えるには、バルザックという強力な小説家の精神的過程の烈しさとは、その脳髓から絞り出した真実の力を、おのずからなる創造の内部に鼓吹し続けたと言わねばならない。こうした一個の創造的力が、決して敗北しなかったのは確かであろう。全てのバルザックの逸話の場合、極めて奇妙な人生と、その精神的幻覚によって発見される状況は、現実と幻覚の区別が付かないほどに、外的実在によって混乱する。そして、その生活全体を投機した幻覚的生活の役割が、現実における導きに無力であったのは、しばしば彼の不均衡のように見える。

おそらく、全ての想像と思想自体に浸透する浪漫主義の悪影響が齎すような、この一時的な不安定の原因を探求する必要がある。そうすれば浪漫主義は、これらの逸話で、必ずや復権するに違いない。それは、逸話をめぐる人々の表面的な言い回しだけでなく、その感情や心のありようを探求



することなのである。バルザックは、小さな装身具に熱中し、骨董好みで、いつでも豪華な恋愛の渦中にあった。其処には『千一夜物語』に匹敵するほど贅沢で空想的な彼が、パリの選良として輝かしい生活をし、如何に特殊で浪漫的な眩惑を抱くに至ったかの事実が発見出来る。

浪漫主義は、非現実的で熱狂的生活と感覚を増幅し、この異常な男の存在には、すでに不可能で愚かしい事情が含まれていた。彼は時空における人間の限界を超越することを熱望した。そして、余りにも豊富な強壯剤で、その溢れる活気に眩惑したのである。

きっと彼は、ほんの一つのことだけを忘却した。それは現実的な出来事の決定的瞬間を考慮しながら、その堅固な壁を、想像と信念で驚異的に跳躍し続けるのを、止めることであった。バルザックの決して断続しない闘いとは、人々が其処に、僅かな反響を聞き、微かな儂さを抱くような超人的闘いである。そうした奮闘努力にもかかわらず、苦い失望に苛まれ、彼は世俗的勝利からは逸脱してしまった。

しかしながら、こうした一種の詠嘆は、彼の世界とその人間そのものを評価する上では、ほとんど何ものでもなかった。悲観主義は、恋愛の力をその本来の気質とする者に、何も齎さなかった。バルザックという一個の人間の思想と理論は、その行動と自己克服の生涯を、決して遺恨を残さないものとしたからである。

つまり、バルザックという好人物で楽天家の生活の喜びに満ちた活力の吸収は、過剰な食欲からの空腹と同様に、波乱に満ちている。そして、其処には騒々しく、しかも楽しく、人眼を引き、がぶ飲みでお喋りな大小説家の実生活における様々な逸話を呼び起こした。彼自身が、恋愛の渦中にあったことが真実であるならば、こうした卑小な欠点を想起させる些細な生存の小話を好んだことであろう。その精神は、特に書簡あるいは実現すべき仕事への情熱で、あらゆる失望を慰めた。だが、逸話の存在にも濃密な意味と価値がある。それも、彼という人間の思い出に、永遠の栄光を与

えているからである。

ジュール・ベルトー

## 1, 【風変わりな容貌】

### 1, 特徴のある鼻と猛獣使いの眼—テオフィル・ゴーチエ

修道服の襟を後ろにはだけて、強靱な運動選手のような首は、円柱の付け根のように丸く、筋張りがなく、白いサテンのような首は、より赤みを帯びた顔と対照をなしている。その頃のバルザックは、まさに年盛りで、浪漫派の苦みと青白さとは少しも調和しない猛烈な精力の徴を呈していた。純粹なツール出身者の血が泡立ち、頬は快活な紅色に満ちていた。厚く曲がりくねった唇は温かく色づき、良く笑った。薄い口髭の膨らみは、その輪郭を隠さずに強調されていた。鼻先は四角く尖って、耳朶と大きく開いた鼻穴には、かなり独自の特徴があった。それはデイビッド・ダンジェの胸像が促すバルザックに似ていた。何よりもそうした鼻にこそ注意を払わねばならない。

額は広く高貴で綺麗で、他の顔の部分よりも目立って白く、鼻の付け根から真直ぐに伸びて、折目が無い。眉毛の上には前頭葉が、はっきりした突出を成している。髪は豊富で長く硬く黒くて、ライオンの鬣のように後ろに流してあった。眼に関しては、決して並立しているだけでなく、生命と光と想像も及ばない磁力を持って、毎晩の徹夜疲れにもかかわらず、子供や処女の調和した2つの黒いダイヤモンドのように、純粹で透明で薄青く、白膜が豊かに光っている。それらは鷺の瞳孔を暗示するようであった。その眼は吸いこまれるほどに黒くて金色に輝き、きっと鷺でも負けて瞳を伏せてしまう。壁や人の胸の内部をも見透かすような、怒った君主の千里眼の、そして猛獣使いの眼である。

### 2, 太った男—レオン・ゴズラン

かなり風変わりな、太った男である。黒髪は馬の毛のようで、眼は小さいが、とても鋭い。それは象の眼であり、猪の眼でもあり、顔は三重顎で、あなた方が欲するような素晴らしい眼である。事実、彼には強烈な食肉業者や、市井の海軍特別奇襲隊員の雰囲気があった。そして、ジャーナリストのように喋った。

### 3、絶え間ない上機嫌—ポンタビス

それは、太った小柄な人であった。衣服の仕立てが悪いので、より一層に不恰好に見えた。手は素晴らしく綺麗である。彼はひどい帽子を被っていたが、それを脱ぐと、すぐにそんなことはどうでもよくなった。私は、あの人の顔に、ただ見とれていた。実際に会ってみなければ、あの額と眼差しは、理解し難いものがある。大きな額で、ランプの光が照るように輝いていた。褐色の眼には金砂が光り、口ほどにものを言う眼であった。鼻は大きく角ばって、口は大きい。歯並びが悪かったが、いつも笑っていて、濃い口髭をたくわえ、長い髪を後ろに掻き上げていた。その頃、彼がうちに来た時、むしろ糞れていて、空腹のようであった。何と云うか、身振りや話し方にせよ、その佇まいは善良で純粋で率直で、知れば知るほど好きにならずにいられなかった。それから、彼が最も風変わりであったのは、絶え間なく上機嫌な所である。それは余りに過剰なので、皆にも伝染してしまった。

### 4、不調和な衣服—ラマルチヌ

バルザックは、大きな体の上に小さなものを着て、優雅さとは全く調和しない衣服を身に着けていた。それは、だらしのない上着や、大きな麻の肌着、薄い青色の刺繍を施した靴などである。それは、まるで体が衣服から炸裂し、いつの間にか大きくなった休暇中の小学生が到来したかのようであった。

## II, 【生活と趣味】

### 5, 観劇嫌い—レオン・ゴズラン

バルザックは、ほとんど劇場に行かなかった。コメディ・フランセーズの休憩室では、たぶん三回ほどしか見かけなかった。私は、ヴィクトル・ユーゴーの『城主』の一幕が上演された時に一緒であった。バルザックは区切られた席の場所にじっとしているのが、全く苦痛のようであった。つむじ曲がりの子供のように、観劇の事々の瞬間に、「もう芝居は終わった?」「一体、いつ終わりになるの?」と言った。

しかし、バルザックは決してヴィクトル・ユーゴーへの大いなる称賛を惜しんだわけではない。如何に敬服する人の作品でも、その芝居の光景が退屈で、長い注目に耐えられなかったのである。

### 6, 執筆の様子—ウェデット

バルザックが書斎で執筆する時は、全くの孤独のうちに、絶対的な遮断をして、カーテンを閉じ、銀の二つの燭台に点じた四本の蠟燭が、机の上を照らした。その小さな机で、彼は書いた。机は両足から十分な間隔があり、太った腹にぶつかることはない。

夏はカシミア、冬は毛織物の仕事着を纏い、白いズボンも大きめで、手足は自由に動かすことが出来て、金糸の贅沢な刺繍をした優雅な赤いモロッコ革のスリッパを履いている。体にはベニスの長い金鎖の帯を絞めて、其処に立派な金の短刀と鉄を吊るしている。そんな恰好で、世間の懸念から遠く離れ、思索し、小説を書く。彼は文章を直し、終わりのない校正を繰り返す。

夜八時になると、軽い夕飯をして、通常の睡眠をとる。そして、いつも午前二時頃には起きて、質素な机に戻る。それから、朝の六時迄、再び筆を執る。軽快に電気火花が散る様に、ペンは紙の上を走った。ただ羽毛のペンの音だけが、孤独な修道士の静寂を遮った。

やがて、一時間程の入浴をしながら瞑想する。朝八時に、下僕のオーギュストが砂糖なしの珈琲を持って来る。

八時か九時頃には、修正された戻しや引き抜かれた若干の原稿の包みの校正が届けられる。制作の仕事は再開され、同じ熱意を持って正午まで続けられる。彼はパンに生卵をつけて食べ、水は飲まず、いつも砂糖なしの二杯のブラック珈琲で簡単な食事をすました。

午後一時から六時迄、また働く。それから軽い食事をとって、とても好きなヴァーヴェレイのワインを少し飲み、心を活気づける。夜七時から八時迄、隣人や友人達と時々は談笑する。バルザックの生活と仕事はそのようなものであった。

#### 7, 大食漢—ルイ・ニコラルド

それはガルガンチュアで開かれた食事会でのバルザックの様子である。伝記作者達は、ヴェリーの店で注文された彼一人分のディナーのメニューに言及する。献立は、オステンド産の牡蠣を百個、牧草の羊のカツレツを12個、家鴨の雛のバター炒めを1羽、焼き鶉を二羽、ノルマンディー産の舌平目を一尾、数えきれない前菜とデザートと果物であった。それから、軽いワインや有名なワイン、珈琲と酒などであった。それはまるで一つの結婚式であったが、罪に対する赦しは無しに、全てが過ぎ去った。

#### 8, 果物の食べ方—レオン・ゴズラン

バルザックはジャルディ荘での食事と接待を、一階の部屋でした。いつも夜六時に対応したが、それは彼の友人より、彼自身のためであった。彼は時々デザートを食べに来たが、全く来ないことも、しばしばあった。生活態度における絶え間ない不規則は、いつも彼の胃の調子を乱した。肉類をわずかしか食べない時は、その代わりに多くの果物を食べた。西洋梨や美しい桃で出来たピラミッドを見ると、彼の唇は、脈拍の烈しきで早く動

き、眼は幸福で輝き、手は喜びで激しくふるえていた。バルザックは、それを全て食べ尽くしてしまった。ネクタイをはずして、シャツを開けて、ナイフを手に持って、笑い、涎を垂らし、ドワイヤネ産の西洋梨の果肉の食べ方は、熾烈であった。私が話しかけたくても、バルザックは食べるのを止めなかった。私だけに喋らせて、爆裂的に笑いながら、ずっと遠く離れて、黙ったままで、果物の皮を乱暴に剥きながら、私の話を嬉しそうに聞いた。果実の量は決して足りたわけではなかったが、十分に満足そうであった。それで、陽気な顎の下で、胸を膨らませて、肩を躍らせた。率直なトゥール地方の人らしく、その元気を取り戻した。それはテレーム修道院にいるラブレーを見ているようであった。彼は素朴で、とても愚かで爆発的な駄洒落に、お互いの幸福感を滲ませた。それは美味しいワインによって触発されたのだけれども。<sup>(6)</sup>

#### 9、珈琲の焙煎と紅茶の秘儀—レオン・ゴズラン

バルザックにとって珈琲は貴重品であった。其処にはヴォルテールが、栄光を競うのに決して妥協しないような覚悟があった。その色合いと香りは何と形容したら良いのであろうか！少なくとも全て彼自身が、いつも焙煎を司った。それは学術的で、微妙な神憑りの天才的なものであった。

そのブレンド珈琲はブルボン、マルチニック、モカの三種類の豆で出来ていた。ブルボンはモン・ブラン街から、マルチニックはヴィエイユ・ゾードリエット街から、モカはサン・ジェルマン郊外の大学通りの雑貨屋で買っていた。私は一度か二度、素晴らしい珈琲を探す旅にバルザックに同伴したが、何処の店であったかは忘れてしまった。パリ中をそうして買物するのは、半日では済まなかった。しかし良い珈琲には、やはりそれだけの価値がある。バルザックの珈琲は最高で、次に挙げる紅茶よりも魅力的な飲み物であった。

紅茶に関しては、味よりも香りを称賛したが、ベニスの金色の紅茶は、

ラタキヤ煙草のように止めてしまった。しかし、本当に味が分かる権利を楽しむには、一種の秘儀を受けねばならない。彼は門外漢には、決してその権利を与えなかった。そして私達も紅茶を毎日飲むことはなかった。もっぱら祝日の時だけ、彼はそれを遺品のように閉じた箱から取り出した。そして、ゆっくりと象形文字に覆われた薄葉紙の上質の封筒を開けた。

「もし人が、この金色のお茶を三度飲んだら片目になる。六度飲んだら盲目になる。」

バルザックは、そう言って、目をつぶって見せた。このことは注意深く慎重に吟味すべき事柄の一種であった。それで、ローラン・ジャンが、『千一夜物語』の、最も薄暗く怪しい所に現出するにふさわしい紅茶を飲む準備をした時、彼は言った。「私は眼の危険を冒すことになる。どうかそれを捨ててくれ！」

#### 10. 煙草嫌い—テオフィル・ゴーチエ

バルザックは如何なる煙草にも我慢が出来なかった。パイプを呪い、そして葉巻きを禁止した。軽いスペインの紙巻煙草さえ認めず、アジアの水煙草はその優雅さのみを認めた。それは、地方色の珍しい小さな装身具として魅かれただけである。彼はニコチン草の弾効演説で、たとえ医者がそれを許可しても、煙草の不利益と周囲への弊害の充分な説明をした。彼は決して煙草を吸わなかった。だが、百歳になっても、その健康を損ねた珈琲への偏愛は、組織的に保持したことであろう。

### Ⅲ、【社交界での異様な振る舞い】

#### 11. 或る文学の夜会で—フォルニエ

ある文学の夜会で、多数の崇拜者の真中で、バルザックが、彼自身の小説の一節を読み上げた。それはただ、彼が自賛する秘儀的な発声法で、読み上げられた。突然、彼は周りの人々にかまわず、それを停止した。そし

て、「何と美しい文章であろうか！」と叫んで、後を続けたのであった。

## 12、常習的な犯行―無記名

或る晩、彼は、手紙を遣り取りする幾人かと、談笑していた。チャールズ・モーリスが喋っていたが、バルザックが突然それを遮って、次の様に言った。「今、茲に居る間に、私の家では三百本の蠟燭が燃えている。それは、ありのままの事実である。」

人々は最初、それに注意を払わなかった。けれども、これはバルザックの常習的な犯行であった。後で、それが果たして本当かどうかの好奇心を煽る賭け事が始まり、実際の検証が為された。それで、5百フランがバルザックの取得となった。

## 13、華麗な杖―ウェデット

バルザックは、友人達から、その『人間喜劇』の作者に贈られた、様々な宝石とサファイヤやエメラルドで飾られた、鼓笛隊のそれをも超える杖を持っていた。杖の頭の内側には、髪の房を置ける窪みがあった。

或る日、この異常に風変わりな品物が失われた。それは所有者の変更を切望する杖の気まぐれであろうか？その軽率さを、幸福なる所有者は許せなかったであろうか？いずれにせよ、彼が外出しようとした時、その有名な杖が見当たらず、すでに消失していたのは事実である。

『ゴリオ爺さん』の作者は極端な不安に苛まれ、顔色が変わった。彼は絶えず、「何とひどい事件であろうか。お願いだから、私の杖よ戻って来い！」と言った。

私は、杖を探しに、新クリスト・コロムに行ってみようと申し出た。それはバルザックにとっては、まるで二世紀の間のような、苛立ちの2時間であった。「ああ！何も戻って来ない。」最後の方策として、バク通り118番の自動車業者の所に、駆け付けることにした。バルザックと私は乗合馬



車を依頼し、その工場へ、まるで爆弾が転ぶかのように訪れた。なんと華麗な杖は、無頓着に一室の角の方に、何気なく置かれていた。それを、どれほどバルザックが喜んだことか！<sup>(7)</sup>

#### 14, 内輪のパーティー—フェリイ

バルザックはしばしば、ルイ・フィリップの統治が始まり、サロンの修復も完成した名高いバグラティオン・プリンセスの所へ行った。彼は、話好きで、感じの良い女性たちの集まりと出会った。

或る晩、内輪のパーティーで、女性の心の繊細さに関する話題になった。「ああ！何てあなたは、女性のことを知っているのでしょうか！」彼の隣りにいた若い女性が叫んだ。それでまあ、バルザックは微笑しながら答えた。「ちょっと見れば、私は、その女性の誕生からの経緯を話すことが出来ます。御婦人、私があなたに関して物語るのを、希望しますか？」「ああ、何ということをして！」婦人達は、小さく叫んで、恐怖心から退散した。

#### 15, 夜会からの退出一オーガスト

それは1840年頃の或る晩、私の知合いで、心地よい浪漫的なフランス語の詩を作るロシア紳士が、夜会を開いた。多数の文学者が招待され、その中に太った男が居た。強烈な表情と低い身長で、華麗な杖で武装し、金色ボタンの服を着て喋っていた。頻繁な身振りで、唸りを立てる独楽のように右から左に回っていた。それは正しくバルザックであった。

私は、いずれの時も、婦人達の様子を眼で追った。そこには常に大声で、大自然のような満足感で、其々の話に笑っているバルザックがいた。

それから彼は、男性達の集まりに戻って多数の新聞や小冊子の虚偽性に関して話している大きなテーブルに近づいた。それで小冊子をとって、その題目を見た後で、「非常に馬鹿げたことだ！」と貶した。それは当時流行していた、アルフレッド・ヴィニーのチャッタートンの記事であった。

ヴィニーの友人のレオン・ウェイリーが、とても丁寧にバルザックの発言を取り上げて、その作品を貶す意味に関して聞いた。バルザックは、詩や詩人の一般的質の低下を主張するために、この質問を利用した。

「そんなものは捨て去って下さい。」彼は続けて言った。「そうでないと、歴史があなた方に、恐るべき滑稽、盗作者、傲慢と恩知らずの奇形的怪物の名称を与えてしまうでしょう。ヴィニーは、痩せ細った紳士しか描けません。それは情緒的には主役でも、女主人のご機嫌を伺うだけの時間を過ごします。そして仕事もせずに、自分自身を駄目にするのです。国家の社会秩序に関しても、その崩壊の直前に、あらゆる種類の愚策を作りました。其処には確実に三つの虚偽と愚劣さが存在します。」

バルザックは、時には粗野な快活とラブレーのような雄弁で、才気を放った。だがその時代にウェイリーは、皮肉にも大作家として世に通っていた。そしてバルザックとは反対に、彼自身が完全な財産を所有した状態で、素晴らしい敵を皮肉な応答で篩にかけたのである。バルザックという小説家は、その頃、明白に彼自身が持っていた土地を喪失してしまった。バルザックは、聞き手の集まりに、その周知の事実を追い詰めた眼差しを感じた。バルザックは、もうそれに関して何も言えなくなった。そしてウェイリーも黙った。彼が土地を喪失してしまった事実とその場の愚かさで、状況が異様に複雑になった。彼は帽子を被り、そして皆に聞こえる無礼な声で言った。

「私には十分な自信がある。だが、この場で、詩人の計略に陥ることに気付かなかっただけなのです。」

そして、彼は退出した。それは、私の生涯で目撃した、あの名高いバルザックの一度限りの出来事であった。

## 16、ジュール・サンドに与えた白い馬—ウエデット

ソフィー・ゲイ婦人のサロンで、私は、バルザックがジュール・サンド

に、実に見事な白い馬を、贈与したことを話す場面に居合わせた。そこには幸福感が満ち溢れていた。その時のバルザックの馬に関する説明の仕方は、注意深い聞き手に、その色形や歩調の特質を述べるものであった。ほんの僅かではあるが、それは次の様な内容であった。

「私は、その素晴らしい軍馬の特質が、非の打ち所のないものであると言わなくてはなりません。それは馬という存在の美しい理想そのものです。それを買えるのは、人気のある純血種を所有出来る商人のみであります！」

話し手は、かって乗馬した中でも、最も卓越と認められた有名な騎手ボシエによって、その真価を試していた。馬に関する説明は、しっかりと30分は続いた。説明の仕方は素早く、印象的な表現であった。その時代は、馬の素晴らしさに関する人々の眼識が高かった。其々の人が気高い馬の頸部を称賛し、その揺れ動く長い鬣を愛撫した。馬の駆足の様なバルザックの説明は、単純な大風呂敷の法螺であったのか？否、そうではない。

この軽快な説明に秘められた意図は、バルザックが友人のジュールに、理想を通して、この馬を与える所にあった。それは高揚した彼自身の典型的表現の一種であった。

## 17, マカロニと英国の若い女性—レオン・ゴズラン

バルザックは、かって一度、カプシーヌ大通りで、私を止めて、疲労困憊の様子で言った。「ああ！私は、もはやお腹が減って死にそうだ。もう午後3時になる。外出して、まだ何も食べていない。何処かで食事をしよう！」「それなら道を戻って、パリのカフェに行こうよ！」「昼飯には遅過ぎるし、夕食には早過ぎる。パリのカフェよりも他に行こう。何処かマカロニ・パスタの店を知っている？」「いや」「君はそれを知らないのか。私にあてがある。其処まで歩こう。」「かなり遠いの？」「まあ、ロワイヤル道路までさ。」

そして、私と腕で掴んで、他の腕に三、四冊の本を抱えて、飢えを加速

させないように、ロワイヤル通りの開いている店まで引っ張って行った。「小さいマカロニ・パスタを下さい！」店に入りながら、バルザックは叫んだ。

「店にあるだけ全部を下さい。」「はあ、分かりました！」若いイギリス娘が、銅で丁寧な作られた板金を焼きながら言った。

バルザックは、テーブルに数冊の本を積み上げた。マカロニ・パスタをのせる場所で、彼は本を掴んだ。「この仕事に如何なる意味があるのか、理解出来る？」「いや、僕には、よくは理解出来ないな。バルザックさん。」

バルザックの名前を聞いて、給仕をしていた若いイギリス娘は、他の客への返答を忘れて、突然、動作を止めた。そして、まじまじと、この太った小さい男を見た。彼女は息を止めて、突然の魅惑に包まれたようであった。『谷間の百合』の作者は、クーパーの『オンタリオ湖』の本を手に取り、それに関して、私に向かって称賛を始めていた。

「けれども、マカロニは食べないの？」「そうだね。食べながら話すことにしよう。」

そして、ガルガンチュア流の三つか四つの吸い込みで、バルザックは、笑いながらマカロニを飲み込んだ。また店の中を歩きながら、クーパーを称賛して、その間にも、二人前のマカロニと、別にもう二人前を平らげた。この若いイギリス娘は、それを眼でしかと見て、とても仰天した。その驚きは、もはやこの男は、花や空気や香水までも食べてしまうのではないかという感じであった。

しかしながら、さらに二人前のマカロニ・パスタを食べてしまって、バルザックはクーパーや、他のイギリス小説、そして『谷間の百合』のことや、ある計画や事業の夢、そして魅惑的構想に関して、熱狂的に論じ立てた。そのことに魅了された若いイギリス娘は、まさに言葉の氾濫の渦中にある身振りで、この小さい活気のある男を眼で追い続けた。

半時間ほど過ぎて、バルザックはレジの所に近づいて行った。

「お勘定はいくら？」彼はマカロニ・パスタの代金を娘に尋ねた。「それは要りません。バルザックさん。」彼女は有無を言わせない決意と誇りの調子で答えた。バルザックは私の方を向いた。「何のために、そうでなければならないの？」彼には不如意な様子であった。それで、不意に、クーパーの小説を取り上げ、若い英国婦人に渡した。

「私はこの本の作者ではないので、それほど多くの後悔はありません。」  
そしてその本は、まるでウブなまま驚かされた崇拜者の手中に残った。

#### 18, 青い上着と金ボタン—エルネスト・バザアル

ある夜会で、バルザックを見つけた。彼は有名な青い上着を着ていた。そして『コーエンス』の作者の情熱的崇拜者である婦人に、金ボタンを引き千切られた。「私達は、何事でもあなたに従って行けば、いつでも勝利出来るのです。」

婦人は、兎にも角にもバルザックに金ボタンを手渡しながら言った。

#### 19, 愛想の良さ—ジョルジュ・サンドに即して

1831年頃、バルザックはしばしばサン・ミッシェル河岸の小さいアパートで、ジョルジュ・サンドと会った。サンドは、そのことに関して、次のように言った。

「彼は太った腹を抱えて岸を攀じ登り、『アンディアナ』の作者である私と話をした。それで家中が息つく間もなく、驚きや笑いや軽口に満ち溢れた。彼は私の机上の若干の紙片を取り上げて、眼をやり、其処には私自身の紙片のメモの意味の可能性を尋ねる意図が少しあった。だがすぐに、彼自身が書いている事柄を思い出して、それに関する話を始めた。その交際は非常に楽しかった。少し言葉には辟易することもあったが、彼の心は鷹揚で、一時的にも無愛想なことはなかった。」

20、異様な格好で送られたジョルジュ・サンドーフエリイ

或る日、ジョルジュ・サンドは友人と一緒に、カッシーニ通りのバルザックの家で食事をした。夕食のメニューは実に奇妙であった。それはミルクのスープと茹でた牛肉、メロンとシャンパンのワインで構成されていた。バルザックは、その饗宴を、とても誇り高く見える絹の素晴らしい服装で持て成した。

招待された彼女達が帰ろうとした時、彼はその服装のまま、オデオン座まで送りたいと申し出た。当時、観測所の地区は、ガス灯が、まだほとんど用意されていなかった。彼は火の点いた、細かく彫り深く飾られた燭台を持った。

ジョルジュ・サンドはこの計画を思い止まらせることを望んだ。

「あなたは家に残って下さい。さもなければ強盗か、どんな犯罪者に帰り道で殺されるかも知れません。」「大丈夫です。」バルザックは笑いながら答えた。

「泥棒は私の頭が変だと思ひ、あるいは私を皇子だと思ひ込み、警察の注意を引き付けるのを、きっと怖がりますから。」

21、ウィーンでの若い学生の誠意—シュルヴィル

ウィーンで、そしてオーストリアでと、彼は或る晩、演奏の会場を訪れた。そして大勢の観客は、『人間喜劇』の作者を歓迎するために立ち上がった。帰り際に、群衆の真中で若い学生が彼の両腕の手を掴み、扉口の所で、「私は『セラフィタ』を書いたこの手に接吻します。」と言った。バルザックは、「私に話したこの若い顔には熱狂と信念があり、その誠実な敬意は私の心に直に伝わった。私の才能が誰かに否定された時、きっとこの学生の記憶が私を慰めることであろう。」と言った。<sup>(8)</sup>

22、舞踏会での頭巾つきマント—アルベリック・スコに即して

或る晩、オペラ座で舞踏会が開催された時のことである。アルベリック・スコンと、オノレ・ド・バルザックが、頭巾つきのマントを着て、この有名な談話室から、あれこれの陰謀と策略を企み、逃げる所を見つけた。バルザックは、ほとんど挨拶や一定間隔の握手もせず、談話室の其々の端の小さい集まりを通り過ぎ、その友人を引きずって行った。『ゴリオ爺さん』の作者は不安で、陰鬱のように見えた。

彼は、この一ヶ月以来、拒絶された証券手形を返済する義務があった。それで出版社が倒産したアルベリック・スコンと接触を持った。訴追は大急ぎで進行していた。彼はそれに如何に対処するべきか分からなかった。状況を清算するのに必要なのは2万フランである。何処に2万フランを見いだすべきか？ それを彼は、その舞踏会に訪れた金持ちと知合いになるという漠然たる希望によって、推進しようとした。彼は時計を見た。「1時半か。ついに私は遅れてしまった。神よ救い給え。」

彼は他の場所へ、金持ち探しに出かけねばならなくなってしまった。頭巾つきマントの相方のアルベリック・スコンの態度の方は、はっきりしないようであった。だが、長椅子を占有していたバルザックの軽い一突きの腕に気付き、一緒に結託して靴を履き、手袋をして、頭巾つきのマント姿になった。仮面の刻み目がちょっとした欠点で、周りには黒いダイヤモンドのように輝いた眼と深紅の唇と歯が見えてしまっていた。

「ちょっとお尋ねしますが、あそこに退出されるのは、バルザックさんではありませんか？」「そうです。あれは彼自身です、御婦人。」「あの人が、とても重大な問題で奮闘しているのを知っているので、私も苦しいのです。私は、彼の秘密を聞いてしまいました。バルザックさんは、何処に彼自身の救済に必要なお金を見つけるかで悩んでいます。その才能を自由に発揮出来るように、彼に伝えてください。茲に私の証券手形があります。あなたは彼にこれを手渡す思いやりをお持ちですよ？」

「はい、御婦人、ですけれど、その提案は、そのままでは受け入れられ

ないでしょう。茲に、またバルザック本人が参ります。それを、あなた自身で確認してから、手渡して下さい。」

すぐにアルベリック・スコンは、優雅な頭巾つきマントの小説家を紹介した。彼等は、少しの間、低い声で会話した。すると傍らの婦人は次の様に言った。

「あなたは、先ほどバルザックさん本人が、茲にいらっしゃると言いました。でも、今、茲に居るのは、私には見知らぬ人です。ですから先ほどの御約束は破棄致します。あなた達が退出なさらないのは、それほど深刻ですか？そうでなければ、どうぞお帰り下さい。」

「まあ落ち着いて下さい、御婦人。このような変装はバルザックの才能の一種です。こうした才能は、あなたの証券手形を受け取るのに十分なではありませんか？」(続く)

(注)

- (1) (『バルザック』シュテファン・ツヴァイク、1944年、訳者 水野亮、早川書房、1959年6月)。
- (2) (『バルザック伝』アンリ・トロワイヤ、1995年、訳者 尾河直哉、白水社、1999年11月)。
- (3) (『フランス文学案内』渡辺一夫、鈴木力衛、岩波書店、1961年10月)の「V 十九世紀 ロマン主義から写実主義へ」に、「一八五〇年以前がロマン主義文学でそれ以後が写実主義文学だと、はっきり分けることはできません。ヴィクトル・ユゴーは一八五〇年以後も、ますますロマン主義的な傾向の作品を書き続けていますし、今日、写実主義文学の先駆ともなった多くの作品を残して、バルザックはその生涯を終えています。」の指摘がある。

こうした文学史は、小林秀雄が「様々なる意匠」で、『人間喜劇』を書こうとしたバルザックの眼に、恐らく最も驚くべきものと見えた事は、人の世が各々異った無限なる外貌をもって、あるがままであるという事であったのだ。彼には、あらゆるものが神秘であるという事と、あらゆるものが明瞭であるという事とは二つの事ではない」として、バルザックの写実主義とは、彼の存在の根本的規定であると同時に、その資質に従って、彼自身の夢を築く地盤と語ったことに関連する。

また、『十九世紀フランス文学』(V.-L. ソーニエ、1952年、共訳 篠田浩一郎・渋谷孝輔、白水社、1958年3月)の「第二章 巨人たちの世代(一八三〇)一赤チョッ



キと真紅のロマン主義—六 バルザック, <人間喜劇>(一八三四—一八五〇)に、「観察力と空想力とは、傑作においてはかならず結合されたひとつの力となる。なぜなら、小説家の辛苦の一切は、写実主義的な発想と洞察的なヴィジョンとの可能性いかにかかっているからだ。そこから生まれる力こそ、一方で人生というものを、あらい合う、汚れた利害関係を中心に動くものと考えさせるにしても、真に個人的な作中人物の像をいきいきと描かせるところのもの」とある。こうしたソーニエの指摘は、写実主義者であり且つ「洞察的なヴィジョン」を抱いた浪漫主義者であるバルザックという作家像の特質に関わる。

こうした壮大な作家の人間像を掴むには、創造された『人間喜劇』の作品とともに、いわば写実的浪漫性を内包した逸話を内省的に選別して、その意味を検討する必要がある。その点からも、ジュール・ベルトーの『バルザック逸話集』には、資料的価値がある。

- (4) 小林の「ランボオ伝」の原文は、*La vie aventureuse de Jean arthur Rimbaud, jean-marie carré, plon-paris* 1926で、『地獄の遍歴者—アルチュール・ランボオの生涯』(ジャン・マリ・カレ, 訳者—江口清, 1971年10月)の翻訳がある。「ボオドレール伝」の原文は、*La vie douloureuse de Charles Baudelaire, françois porché, plon paris* 1926, で、『ボードレールの傷ましき生涯』(フランソワ・ポルシェ, 訳者—中込純次 昭森社1982年11月)の翻訳がある。その年代から、小林は新刊本を訳読していた。
- (5) 原文に、其々の逸話の語り手の名は記されているが、目次や番号は付されていない。しかし、ジュール・ベルトーの逸話の配列には、ある種の工夫が施されている。それ故に、『バルザック逸話集』の序文と其々の逸話に、番号と見出しや小見出しを付けて、新たに目次を作った。D'après Werdetのような編集者の記述は、「ウエデットに即して」〈3箇所〉とし、また、「無記名」〈5箇所〉もある。今回の訳文(1)は、枚数規制の関係から、序とⅠの1、からⅢの22、までの前半部分を掲載する。
- (6) (『バルザックと19世紀パリの食卓』アンカ・ミュルシュタイン, 2010年, 訳者 塩谷祐人, 白水社, 2013年1月)の第一章「バルザックの食卓」に部分的意識があり、参考にした。
- (7) (『バルザック 人と思想』高山鉄男, 清水書院, 1999年8月)は、読みやすい入門書であり、バルザックの人物像が概観出来る。「Ⅳ 模索と成熟 三 バルザックの生活習慣」の、「バルザックの日常生活」「コーヒーの効用」「バルザックのステッキ」などの節は、その風変りな生活を掴むのに役立つ。
- (8) (『わが兄バルザック—その生涯と作品』ロール・シェルヴィル, 1858年, 訳者 大竹仁子, 中村加津, 鳥影社, 1993年4月)に全訳があり、参考にした。